

長崎市立図書館の 地域における小児医療への関わりについて

－小児在宅医療・小児がんを例に－

佐藤美加

長崎市立図書館（TRC九州株式会社）

小児医療；小児在宅医療；小児がん；医療健康情報サービス；公共図書館

1. 課題と目的

長崎県が「平成 25 年度小児等在宅医療連携拠点事業」のモデルプログラムに採択されたことを受け、長崎市立図書館では長崎大学病院小児科と長崎県医療政策課と連携し、小児医療支援への取り組みを開始した。長崎県の小児在宅医療が抱える課題には、患者や家族が必要とする情報が未整理であること、技能的な研修会・講習会の提供が不十分であることが挙げられる。長崎市立図書館では、小児在宅への理解促進、情報の集約と提供を目的に「公共図書館だからできる支援」の実現に取り組んだ。

2. 方法

- ① 小児在宅医療を知る（医療従事者向けの研修会に参加）
 - ② 臨床の現場で小児在宅医療を知る（静岡県立こども病院医学図書室研修）
 - ③ 小児在宅ブックリストの作成
 - ④ 「地域で支える みんなで支える 地域医療を受けるこどもたちと共に」開催
- ※ ①～④を児童サービス担当者、障がい者サービス担当者と共有・協力

3. 結果

小児在宅医療について、その実情を知れば知るほど「公共図書館にできることが本当にあるのだろうか」と思われるほど抱える課題は大きく重く深かった。しかし、研修会に参加したり、臨床の場で学びを深める機会を得たりと、様々な角度から「現場」を知る機会に恵まれたことで様々な支援を実現することができた。また、病院や行政と一体となって取り組んだことにより、図書館の存在意義の向上にも結びつく結果となった。

4. 考察

一連の取り組みを実践していく中で実感したことは、公共図書館が小児在宅医療の実情や課題を正しく認識した上で「何ができるか」を考えることの重要性である。そして、児童サービスや障がい者サービスなど、多角的な視点から支援内容を検討することが「公共図書館だからできる支援」の実現に大きく寄与していることもポイントである。今後も行政や病院と協力し、公共図書館として小児医療支援に取り組んでいきたいと考える。